

胃癌に対する S-1 を用いた術後補助化学療法のコンプライアンス 福岡大学筑紫病院および福岡大学病院における胃癌患者の服薬状況の検討

前川 隆文¹⁾ 三上 公治¹⁾ 河原 一雅¹⁾
永川 祐二¹⁾ 篠原 徹雄²⁾ 星野誠一郎²⁾
佐藤 啓介¹⁾ 二見喜太郎¹⁾ 山下 裕一²⁾

1) 福岡大学筑紫病院外科

2) 福岡大学病院消化器外科

要約：S-1 単独療法を用いた術後補助化学療法の大規模試験（ACTS-GC）の結果が報告され、全生存期間および無再発生存期間において有意に S-1 群が手術単独群を上回り、その有効性が証明された。福岡大学筑紫病院外科および福岡大学病院消化器外科で根治度 A と B 胃切除術症例に対する胃癌補助化学療法で、S-1 服薬の割合と服薬コンプライアンスを調べた。補助化学療法が56例に施行され、40例に S-1 が使用されていた。1年間の S-1 完遂率は26例（65.0%）であったが、13例は投与スケジュールの変更が行われ、4例は減量が必要であった。Grade 3 の有害事象は白血球減少で、2例に起こった。投与中止となった主な理由は、倦怠感、食欲不振を呈する有害事象であった。今後の課題として、完遂率を上げる投与スケジュールの研究と倦怠感と食欲不振を緩和する薬剤の開発が必要と考える。また、治療担当者は S-1 の抗腫瘍効果を安全性と有効性のバランスを保つため、S-1 の特性、有害事象のマネージメント、薬物相互作用など十分な知識を持ち、使用する必要があると思われた。

索引用語：胃癌，補助化学療法，S-1，コンプライアンス